

土門拳の 何んでも帖！

記録と記憶

めくるめく
“メモ”の宇宙へ

2026年1月30日 [金]
→ 4月12日 [日]

9:00-17:00 (入館は16:30まで)

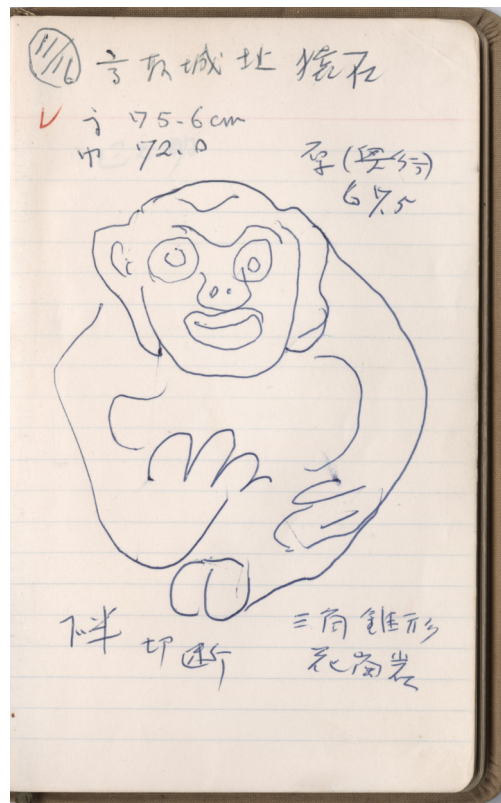
1月～3月は月曜休館

(2月23日(月・祝)は開館し、翌24日(火)休館)

入館料 一般900円 / 高校生450円 / 中学生以下無料



《高取城二ノ門址猿石残欠》
1964年頃



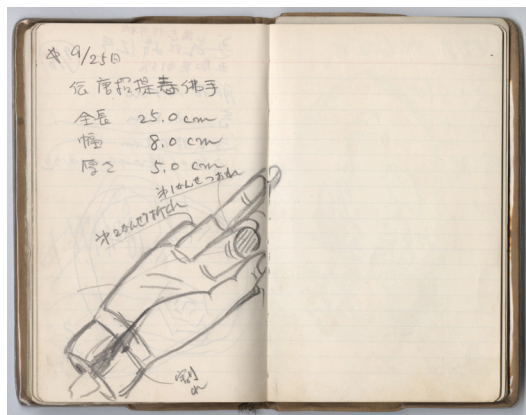
《高取城二ノ門址猿石残欠》のスケッチ
「何んでも帖2」より / 1963年頃

戦前に「報道写真家」として出発した土門拳にとって、メモ帖やノートを持ち歩き、印象的な出来事や被写体のデータ、写真集の構想などを書き留めることは若い頃からの習慣でした。オーダーメイドの品物を好んだ土門は「何んでも帖」と称した手帖まで特注で制作し、弟子たちにも配布。「記憶はやがて曖昧になるから、なんでも書いておけ」と、メモすることを奨励していたそうです。土門は撮影そのもののみならず取材時の記録を文字で残すことに強いこだわりを持っていたといえるでしょう。

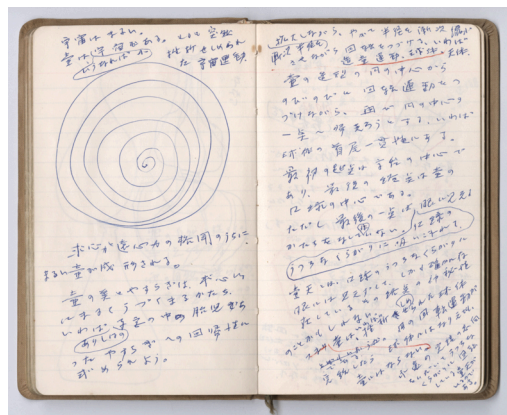
これまで当館には4冊の「何んでも帖」が所蔵されていましたが、2025年春に行われた調査によって新たに計24冊のメモ帖やノートが発見・整理され、当館に寄託されました。本展ではこれら全点を初めて一堂に公開し、その内容を検証しつつ、カメラとメモが紡ぎ出した写真の数々を振り返ります。



《伝唐招提寺菩薩形右手残欠》
1964年頃



《伝唐招提寺菩薩形右手残欠》のスケッチ
「何んでも帖1」より / 1964年頃



「宇宙はまるい。壺は、いうなれば小宇宙である…」
「何んでも帖2」より / 1964年頃

同時開催

土門拳が写した女性たち 1930-1950年代

土門拳が1930～50年代に撮影した「女性たち」に焦点をあてます。戦後日本のあらゆる場面で従来の価値観が揺らぐ中、女性の社会参画の在り方は大きく変化し、写真に写る「表象としての女性」も移り変わっていきました。

モダンな装いで都市を行き交う女性と、農村で伝統的な家業に従事する和装の女性。工場で働く若者と、子守りをする母親。芸能や遊郭の世界に身を置く者たち。彼女たちはさまざまな社会状況を反映し、ときに矛盾も抱えながら、多様な姿を見せてきました。土門が女性たちに向けた視線、彼女たちが社会に向けていた眼差し、そして現代を生きる私たちの視点といった複層的な要素が写真の上に交差することで、時代の姿を新しく見つめ直す機会となれば幸いです。



《道行く女たち 仙台》1950



《飛行少年団少女部員 少女たちの訓練》1937年



《戦後 肉体の門 新宿帝都座》1947年



《人々 待つ女 東京新宿》1949年

会期中のイベント *詳細はお問い合わせください

何んでも意見交換会 in 土門拳写真美術館

1月31日（土）14:00-16:00（予定）

参加無料（要入館料） / 要予約

土門拳写真美術館への感想や要望から、芸術や日常生活に関する相談まで、参加者の意見・質問について当館学芸員が幅広くお答えしながら語り合う会です（内容によって上手くお答えできなかった場合は申し訳ありません）。

担当学芸員：田中耕太郎

学芸員によるほほ月イチギャラリートーク

2月14日（土）「土門拳が写した女性たち 1930-1950年代」 担当学芸員：王憶冰

3月14日（土）「土門拳の何んでも帖！」 担当学芸員：田中耕太郎

いずれも14:00- / 参加無料（要入館料） / 要予約

朗読会『宝の日』土門拳写真美術館で吉野弘さんの詩をよむ

2026年2月28日（土）14:00-15:00

出演：酒田詩の朗読会 / 参加無料（要入館料） / 要予約

「土門拳が写した女性たち」展関連自主事業

春を先取り！個性を活かすメイクアップセミナー

2026年3月16日（月）13:00-15:30

講師：資生堂ジャパン / 参加費：900円 / 要予約

